

今村夏子「こちらあみ子」論

—〈垂直〉に向かう身構えと世界把握—

小野光絵

はじめに

短編小説「あたらしい娘」は、今村夏子のデビュー作かつ、第二六回太宰治賞の受賞作（初出『太宰治賞 2010』筑摩書房 二〇一〇年六月）である。「こちらあみ子」と改題され、書き下ろしの短編「ピクニック」を併録した『こちらあみ子』（筑摩書房 二〇一一年一月）によって、第二四回三島由紀夫賞を受賞した。

このテキストでは、田中あみ子という少女の小学四年生から中学卒業にかけての時期を中心に、家庭や学校での出来事が、彼女の視点に寄り添った三人称の語りによって回想的に語られていく。同級生の「のり君」への片思い、そして、義母があみ子の悪気のない言動に深く傷ついて心を病むとともに家庭が崩壊し、やがてあみ子が父方の祖母の家に引き取られることになった経緯が物語の大きな軸となっている。

今村テキストについての本格的な先行研究は、全体としてまだ少数に留まっており、書評や新聞記事などが主である。そこでは、代表作とも言うべき「こちらあみ子」「あひる」「星の子」「むらさきのスカートの女」などが取り上げられる機会が多く、「認知に偏りや欠落がある」（佐々木敦 二〇一九）^{注1}、「世界を認識する力の弱い」（江南亜美子 二〇一七）^{注2}、女主人公たちの視点を通じて世界を語るといふテキストの構造に注目がなされてきた。

あみ子は、他の子とは少し、もしかしたらかなり、違っている。しかし彼女はもちろん、そのことをわかっているわけではない。

（中略）あみ子という少女の認知に偏りや欠落がある（中略）小説の視点を彼女に一〇〇パーセント重ねてしまうと、何が何だかわからなくなってしまうだろう。これがこの小説が一人称では書かれなかった理由であり、三人称でも彼女を視

点人物になり切らせることが出来なかつた理由だと思われる。

(佐々木敦 二〇一九)

あみ子の認知の偏り・欠落については、佐々木氏以前にも、しばしば断片的な指摘(「風変わりな少女」^{注3}、「ちよつと変わった女の子」^{注4}、「個性が強すぎて周囲になじめない少女」^{注5}、「少々風変わりな女の子(中略)いわゆる『空気が読めない』子」^{注6}、「風変わりな小学生」^{注7})がなされている。

さらに、あみ子の認知のありかたについては、個性という範疇に収まるのではなく発達障害等の可能性を指摘する向きもある^{注8}。だがその一方で、作中で病名などへの言及が皆無であるにも関わらず、病名を与えて囲い込むような読みへの異論も呈されている^{注9}。しかし後者の場合も、それによって何が見落とされるのかという、もう一步具体的に踏み込んだ論考には至っていない。

また、今村の女主人公たちが「無垢」、「純粹」、「無邪気」であるなどと、その属性を挙げる論も散見される^{注10}。しかし言うまでもないが、これらも同様に、既成の枠組への取り込みに他ならない。

盲目であるなら語り手は視覚情報を持たず、三歳児なら世の道理を解さない。同様に、認知症患者をはじめ、世界を認識

する力の弱い人(知的障害者や統合失調症の患者など)が一人称を担う場合も、その認識は部分的であつたり、偏つたりせざるを得ない(中略)この、持たざる者から見える世界を描くという小説の構造(は『星の子』だけでなく今村作品になじみのものであり、)(中略)デビュー作『こちらあみ子』も『あひる』も、相似の構造である。それらの女主人公たちの「持たなさ」はいっそ無垢と呼べるほどだ

(()) 内は論者による(江南亜美子 二〇一七)

例えば右に引用した指摘では、あみ子たちを、三歳児や認知症患者、精神病者、知的障害者と並置する形で、「世界を認識する力の弱い」、あるべき何かを「持たざる者」とみなしている。その延長線上において「無垢」という言葉が選ばれていくのである。

既出の佐々木氏の論においては、「無垢」と見なすことについて、一見批判的である。「純粹無垢な存在」「聖なる愚か者」という言葉を退けつつも、同時にあみ子が「オブラート」に包まれているかのように「世界の酷薄さを見ずに」、あるいは「気づかず」にいられる人物であり、「最後まで色んなことに気づかないままである」という見解が断定的に述べられており、その点では江南氏の見解(「世界を認識する力の弱い人」「持たざる者」を含む従来の読み

を大きく覆すものではない。ここに掲げた以外にも、「周囲の人間とうまくコミュニケーションが取れず、学校の同級生からはバカにされながらもまったく気にすることなく奔放に生きる少女・あみ子」(橋富政彦 二〇一)^{注11}、「読者はこの少女の目で世界を見ながら、本人は気づいていない周囲との齟齬に胸を傷めることになる」(瀧井朝世 二〇一)^{注12}といった解釈があり、「気づいていないあみ子」と「事態を俯瞰し把握する周囲、あるいは読者」という対比的な構図で論じられてきたふしがある。

あみ子は、「明確に言語化されたレベルの思考」においては物事を理解していないかもしれない。だが、詳しくは本論において順を追って検討していくが、彼女の「イメージレベルでの世界のとらえ方」に焦点を当てて読み直したとき、あみ子が決して「オブラート」に包まれたような無傷でいるわけではないことが明らかになっていく。あみ子は外界に晒され、ある種の危機を感受していたのである。さらには他の人が思いもよらず見過ごしている物事を鋭く感知している。先行研究ではこの重要な点が明らかに看過されてきたのである。

小川洋子は、太宰治賞選評(「あみ子との出会い」、『太宰治賞2010』前掲書)において、「あらすじを説明しても、そこからこぼれ落ちてゆくものの方が多い小説」という点を、三浦しをんの見

解に賛同しつつ高く評価している。無論、その「あらすじからこぼれ落ちてゆくもの」全てを指摘することなどは叶うべくもない。しかし、これまで見落とされてきた細部、特に「母のほくる」などのイメージに着目して分析することで、「精読を通じて見えてくるあみ子像」を浮き彫りにし、「こぼれ落ちて」きたものの一端にであれ、あえて論証という形で切り込むことを試みたい。

一、〈言葉〉との亀裂

本論において、「こちらあみ子」というテキストの隠れた構造として注目したいのは、あみ子と〈言葉〉との間に横たわる亀裂である。このテーマは形を変え、あみ子への攻撃や疎外、あるいはあみ子が抱く違和感と深く結びついた形で象徴的に立ち現われる。それは例えば、何者かによって父の車に「あみ子の馬鹿」と彫り付けられた落書きの〈言葉〉であり、あみ子を締め出す母の習字教室である(「母とあみ子との間の齟齬」がすなわち〈言葉とあみ子との間の齟齬〉を如実に映し出しているという関係については後述する)。習字に関して言えば、学校の掲示板上に「クラスメイト全員の習字作品が貼りだされ」ている中で、「あみ子の作品は貼られていな」と語られ、彼らからの疎外が象徴されている。

同級生の「のり君」へ好意を示すときも、「投げキッス」をした

り、ハート型のチョコレートの衣を舐めとった後のクッキーを渡したりする一方で、直接「好き」と言葉に出す事はない。ただ一度、中学卒業間際、のり君に「好き」と口にする場面があるが、この玉砕の場面はよく見ると少し複雑である。ここで「あみ子のところ」が「容赦なく砕けたのは決して、のり君の「殺す」という返事やパンチによつてではなかったからである。むしろ、のり君の「『殺す』は、全然だめだった。どこにも命中しなかった」と念を押されている。その上で、あくまでも「破壊力を持つのはあみ子の言葉だけだった。あみ子の言葉がのり君をうち、同じようにあみ子の言葉だけがあみ子をうった」というのが、あみ子の側に寄り添った語りである。

つまり（のり君に告白して拒絶されたので心が砕けた）のではなく、言葉で想いを伝えるという行為こそが、自身の心を打ち砕く破壊的な行為だったということなのである。「殺す」という、のり君からの強い否定のつもりであるはずの言葉をも力強く圧倒しつつ、この場面でも、言葉に対するあみ子の距離感——違和感やズレ、あるいは不信、が印象づけられているのである。

それは、次のような形でも現われている。

この告白以前、あみ子のはのり君のあだ名しか知らなかった。「名簿などでのり君の姓名を何度も目にしてきたはずなのに」、「熱愛」

する相手の本名を、六年もの間、頑なに知らぬままで通してきたのである。そこには「勉強をさぼってばかりいたあみ子にその漢字は難しすぎた」という理由付けもなされてはいるが、それに続けて「だけでもう決めたのだ。あみ子は知ることにした」という決意が語られる。「もう決めた」「知ることにした」という表現には、のり君の本名を知ることについてのあみ子の意識のありようが示されている。すなわち、あみ子のはのり君という存在から「鷲尾佳範」という本名をあえて剥ぎ取ったままにしておいたのである。この「佳範」という名前は、「佳」に、規範の「範」と書き、いわばこの世における（正統なる価値基準）を意味しているという点において非常に象徴的である。すなわち、のり君に「さよなら」する直前まで、あみ子はそのイメージを見えないものにしてきたことになるからである。

ここで確認しておきたいのは、ある言語を身につけるとは、その言語を用いる共同体の価値観に適切し馴致されることと不可分だという点である。言葉が既に体系化された共有物であるからこそ、それを媒介にコミュニケーションは成立する。コミュニケーション力とは、自身を共同体に適応・通用させるための能力に他ならない。

私たちは生身の人間である以上、多かれ少なかれこの世に根づ

いて生きており、そこでは生命維持や、ひいては社会適応のための身ぶりや言葉遣いが不可欠となる。常識や倫理、気づかいや協調性、そしてコミュニケーション力などといったものが重要な価値を持つているのだ。本論ではそれらを総称して「水平方向の価値」と呼ぶこととする。

それを欠くことは無論、死活問題である。ある無名のクラスメイトは、あみ子の誤字だらけのプリントを目にして思わず忠告をしている。「おまえ小学校のときから全然勉強しとらんじゃろう。さぼってばかりおつたらどこの高校も受からんで」。

ましてや、あみ子の母は、作中で誰よりも口を酸っぱくしてあみ子にこう言う。

「いけません。ちゃんと宿題して毎日学校にも行ってお友達とも仲良くして先生の言うことをしっかり聞いてお行儀よくできるならいいですよ。できますか？ 授業中に歌をうたったり机にらくがきしたりしませんか？ ボクシングもはだしのゲンもインド人ももうしないって約束できますか？ できるんですか？ できますか？」(117)

だが、母が言うような「水平方向の価値」に、あみ子は同化する

ことができなない。家庭はおろか、学校も（少なくとも小学四年生の時点から）ずっと不登校がちである。友達と呼べような存在は見当たらず、同級生からは嘲笑され、中学では上級生から特に理由もなく殴る蹴るの暴力を受けている。母は、こうした娘の現在や将来を案じて叱っているのかもしれない。なぜなら母は叱るだけでなく、あみ子が好む料理をメモしておいて作ってくれるなど、あみ子に寄り添おうする姿勢も示しているからである。

しかし母は「常識」をはみ出すことを毛嫌いするばかりか、人一倍潔癖かつ厳格に秩序を志向し、その点において、あみ子との組み合わせは双方にとつて極めて悲劇的であると言わざるを得ない。母はいつも髪をきっちり整え、習字の生徒との間にも生活空間に踏み込ませないよう一線を引く。そして、娘であるあみ子にまで敬語で話す。学校給食で「献立がカレーライスのときだけで食べる習慣があつた」あみ子を母は決して認めない。

だが、あみ子の方は「インド人のまね」、すなわち異文化を取り入れているつもりなのである。周囲からは単なる奇行や問題行動と見なされるような一見無秩序な振る舞いが、実はあみ子自身の「世界のとらえ方」に基づいた彼女なりの創造性の発露であつたということが、以下のような箇所からも読み取れる。

・登校したところで先生たちから叱られてばかりのあみ子は、最近では保健室で寝て過ごしたり図書館でマンガを読んだり、授業には参加せずに独自の方法で下校までの時間を潰すことのほうが多かった。(pp.42-43)

・登校するかしないかは、その日の気分次第だった。(p.58)

・菓子を食べるマンガを読み、テレビを見て昼寝をし、その合間に自作の体操をすることが、学校へ行かない日の決まったスケジュールだ (pp.44-45)

・「田中、外でうたえ」教壇でテストを監督していた先生にそう言われて、席を立った。／保健室では他に体調不良の生徒がいない限りどんなに大声でうたっても誰も怒ったりしない。菓子やジュース、マンガやオセロも隠してあって教室の中にいるよりもずっと居心地がいい。(p.11)

あみ子は「叱られてばかり」であるが、そのことで劣等感を抱いている様子はなく、また、叱責の言葉によってやりたい行動を諦めてもいない。むしろ、どれだけ否定されてもなお、自身の中から湧き出る「気分」こそを行動の拠り所にするという(「わたし性」)をしぶとく貫いている。それは鈍感さゆえではなく、図書館や保健室に移動するのは「教室の中」にいるよりもずっと居心地が

いい」からで、教室での居心地の悪さを確かに感受しているのだ。そこから抜け出して歌や菓子やマンガを楽しむという過ごし方を、「独自の方法」の発見であるとし自負させている。不登校の日も、ただ漠然と過ごすのではなく、自分で決めたスケジュールに則って行動している。その一環としての体操も、自らあみ出したものである。あみ子が学校を「さぼってばかり」いることは、あみ子の考えに即して言えば、既存のやり方に黙って従うのではなく、自身に合った方法を考案するという創意工夫に他ならない。

あみ子の〈問題行動〉を通じて垣間見せているポジティブな価値の片鱗は、先ほど言及した〈水平方向の価値〉によって測ることができないものである。

ここでもう一つ新たに提示したいのは、それと対をなす別の価値、すなわち〈垂直方向の価値〉である。それは、自身が属する共同体に適応し、そこに着地するのではなく、むしろそこを突き破って外へ飛び出していき、〈水平方向の価値〉に揺さぶりをかける身構え、言葉構えなのである。共同体にとっては時に負性を帯びるそうした構えは、それゆえ逸脱性や破壊性、協調性の欠如など見なされることになる。

しかし、そのことと表裏一体のものとして、〈批評性〉、つまり共同体を外側から俯瞰し相対化する視点や、新たなものをつく

り出す（創造性）、また、既存の価値からの（超越性）として、共同体に新たな価値をもたらす可能性を、それは秘めている。こうしたあみ子に親和的な価値基準を、本論では積極的に問い直してみた。

中学卒業まで、あみ子は劣等生として位置づけられるばかりで、周囲には彼女の潜在的な才能に気づき、評価し、期待をかける人物はいなかった。しかしその中で注目すべきは、「ばーか。でもええのう。なんか、自由の象徴じゃのう。ま、はじめの象徴でもあるけどの」と言う、先ほども触れた名無しのクラスメイトである。彼は、あみ子の体現する異才（垂直方向の価値）の片鱗と、それに伴う受難（水平方向の価値）から逸脱することに対する共同体からの制裁）を的確に言い当てている。

あみ子が「認知に偏りや欠落がある」「世界を認識する力の弱い人物に見られるのは、彼女があまりにも常識に囚われず「自由」に振舞うからであり、なおかつ（常識）というものの方こそが、実は偏見と惰性に満ちた（認知の偏りと欠落そのもの）である」と気づく人間が少数派だからだ。この無名のクラスメイトはそうした少数派の一人だと言ってよい。あみ子の誤字だらけのプリントに対する彼の反応は鋭敏で、特筆に値する。

「（中略）ていうか、今気づいたけど、おまえのプリントなこれ。その漢字（中略）私っていう漢字に送り仮名はいらん。しをつけたら、読むときわたしになるじゃろ。朝っていう字も左側が車になっとる。こわい。字も汚い」（p.70）

あみ子の書く文字の微妙な不正確性が、見慣れぬ異様なものとして彼に違和感をもたらしている。それが「こわい」のは、共同体の常識から浮き上がった（垂直方向性）、つまり、彼らにとっては未知の世界の片鱗を、あみ子が垣間見せるからだ。

あみ子が言葉と関わる時、それはありふれていて見慣れた既成のものとは違った何かに変形・変換される。後述する「弟の墓」もその一例である。

ところで、そのようなあみ子から見ても「あみ子の字とは比べものにならないくらいきれいな書体」と絶賛される「のり君」の字の美しさとはどういったものなのだろうか。

それが「うまい」とほめられているのはただ一カ所であり、他に「きれい」と七回、「美しい」と三回、「すごい」と三回ほめられてはいるものの、すべてあみ子による評価である。先述した名無しの少年などは、「なにが。どこが」「ふーん。ようわからん」

と不思議そうな反応を示し、「おまえ字汚いものう」とも言う。

つまり、のり君の字はあみ子の字よりは相対的にきれいだであるという、その程度の平凡な印象しか語られていないのだ。何よりもあみ子は、のり君に初めて関心を持った際、「『こ』の下の棒の終わりから、ゆっくりとしずくが垂れ始めた。まるでにつこり笑った口の端から垂れる黒いよだれのようだった」と、「よだれの字」

として彼の字に心を奪われたのであり、その感覚は世間一般的な意味において〈美しい字〉を価値づける基準からは絶妙に外されているのである。そのように、〈常識〉から飛躍・逸脱した形で、あみ子は言葉と接点を持つ。

あみ子の、言葉に対するこのような価値基準や齟齬といったものをもし洗練させていくなら、それは文学や芸術の言語——既成の意味を組み替えて、未知のものをこの世に顕在化させていく創造行為、ここへ限りなく接近していくのではないだろうか。そのような性質を象徴するかのようには、あみ子のトランシーバーは片方が失われ、残された一方も故障する。だから、「応答せよ。こちらあみ子」という彼女の言葉は宛先を持たない。だがそれでも、あみ子は沈黙することはなく、「ひとりでしゃべることに」する。すなわち、これももし洗練させていくならば、文学や芸術の表現

へと肉薄するような行為に向かうのである。

あみ子は決して意図して創造的であろうとしているのではないだろう。しかし、共同体の言葉に熟達せず、間違えたまま使うということ、それを〈訓練〉や〈矯正〉されない汚い字で書くこと、さらには、周囲の誰かとのコミュニケーションに向かわない言葉を発するという行為を通じて、既成の価値観へアンチの姿勢を表わしていると言えよう。

本論の「一」で確認したように、あみ子はそうした表現行為を殊のほか自覚的に行っている。あみ子の「馬鹿」と見なされるような振る舞いの裡に、半ば無意識的な抵抗が、この世に馴致されることへの抵抗が含まれていても不思議ではない。あみ子と言葉との間の亀裂は、無知と見分けがつきにくいのが、ここには、自身の感受性を守るための人知れぬ闘いが含まれているのではないか。この問いについての考察は次項以降で詳述したい。

二、「希望」の「完成図」

あみ子の母が「習字」の先生であるという点はまさしく象徴的である。「習字」とはその名の通り、文字の書き方を習うことであり、同時に外見を美しく整えて書く作法であり、そこには〈矯正〉や馴致という働きが伴う。この道のエキスパートである母は、

規律正しさを、逸脱せず（普通）であることをあみ子に要求する。彼女に対し、あみ子が不思議な振る舞いをする場面がある。

細くとがった二つの目がこちらを見て、とまった。／ゆつくりと近づいてくる母のあごのほくろを見上げながら、あみ子は堂々と訴えた。「入つとらんもんね。見とつただけじゃもん」

(p.16)

あみ子を睨む母の目ではなく、ほくろに向かって訴えかけているようなこの振る舞いは一体何を意味するのだろうか。ほくろなら、あみ子の言い分を聞いてくれると期待しているかのような。

あみ子の母は、あみ子が十歳の時にお腹の赤ちゃんを亡くす。しばらくして、ようやく元気になった母が書道教室を再開するという時、あみ子は「祝いの品」として、「弟の墓」と書いた木札をプレゼントする。それは「のり君」に無理を言つて書いてもらったものであり、「すごいね、きれいな、と言ってもらえると思った」のだが、かえって〈呪いの品〉として作用してしまう。母は、「こころの病氣」をわずらつて無気力状態となり、夫婦の寝室も別々となつていく。兄も「不良」になつて家を空けるようになる。あ

み子は中学卒業と同時に祖母の家に引き取られることになり、家族はばらばらになつてしまう。

しかしあみ子は、母の異変を目の当たりにしても「突然やる気をなくした」という理解しか示しておらず、周囲も諦めているかのように「あみ子は誰からも叱られ」ない。

ところが、細部をよく読むと、あみ子は何かを直観しているようなのだ。以下に、イメージを通じて語られる、あみ子の無意識レベルでの世界把握を整理してみたい。（イメージレベルでの世界のとらえ方）というものについて、ユング派の心理療法家・臨床心理学者である河合隼雄は次のように述べている。

人間の意識領域は自我によって統合され、言語によってその内容を把握することができる。（中略）しかし、自我によって確実に把握することが難しいものほど言語化することが難しくなつてくる。まったく無意識に属することは、（中略）意識的に把握されるはずがない。しかし、意識と無意識の（中略）中間領域あたりの動きは、イメージとして把握されるところと考えられる。（河合隼雄『影の現象学』^{註3} pp.17-18）

このようなイメージの働きは、例えば次の場面の中に語り出さ

れている。

初めて母から書道の手ほどきを受けていた。背後にまわった母が、自分の筋張った手を覆いかぶせるようにして、筆を握る娘の小さな右手を包んだ。(中略) あみ子は自分がなんとという文字を書こうとしているのか知らなかった。母から自由自在に操られている見えない右手が、黒く濡れた線や点、棒やうねりを勝手に描く。(中略) 完成図は母しか知らない。白い半紙の上半分、初めに『希』という図が完成した。(中略) 再び筆を持ち直し、(中略) やつと完成した下半分の図は『望』。／「きぼう」と言った母の顔を振り返り見たら、ほくろがふれあうほどのあまりの近さにびっくり仰天した。ものすごく近かった。お母さんの好きな言葉なの、と母は言ったけれど、それどころではなかった。(pp.50-51)

今村夏子テクストの特徴として「内面に触れずに、外面だけ、風景だけを写真のように描いてい^{注14}」るという指摘がある。しかし、物事を(どのような言葉で語るのか)という具体的な肉の部分に、あみ子の世界把握のありようが細かに反映されているという点を見のがすわけにはいかない。

「希望」の「完成図」は母だけが知っている。つまりあみ子は母と「希望」を共有できておらず、完全に置いてきぼりにされているのだ。母は自分の手をあみ子の手に「覆いかぶせ」、「包」み、「自由自在に操」る。そして母の好きな文字を「勝手に描く」。あみ子のほうは何も了解していないにもかかわらず、じわじわと主導権を奪われて、操り人形にされていく。描かれた「希望」という「字」もあみ子には「図」にしか見えていない。

母があみ子を連れ込もうとしている「希望」の世界は、あみ子にとっては、意味が抜け落ちた世界なのだ。

母はこれまで、あみ子との間に面然とした一線を引いており、「お行儀よく」できないあみ子を習字のレッスンからはむしろ遠ざけていた。だが、あみ子にとっては、母が「習字」とともに急接近してきたことのほうが、よほど恐ろしいことではなかっただろうか。その〈侵入性〉についての論考は次項に譲る。

三、「母のほくろ」と「弟の墓」

先に引用した通り、母が「きぼう」と言った際、母のほくろが「ふれあうほど」あみ子に接近し、あみ子は「びっくり仰天」して、その近さに動揺をみせる。

病院から帰って来た母から初めてスキンシップを受ける場面で

も、あみ子は母のぬくもりを喜ぶというよりは、〈侵入性〉への防衛反応をみせている。

「ただいま」そう言つて、母はあみ子の手を取つた。あみ子はびつくりしてその手を引つこめようとした。だが母は娘の右手を離さない。上下から押さえるようにして包みこみ、「氷みたい」と小さく言つた。／母にふれられるのは変な気分だった。あみ子はそれまで母から抱きしめられたり頬ずりされたりぶたれたり引きずり回されたりしたことが一度もなかった。

(pp.38-39)

母とあみ子の間これまで一度もスキンシップがなかったことは〈冷たい関係〉〈ネガティブな関係〉であり、触れるようになった変化の方が〈温かい関係〉〈望ましい関係〉になつたと解釈されそうな場面である。

しかし、あみ子はむしろ母の手に驚いて手を引つこめてしまうのだ。その時の気持を「いやな気持ちではなかったけれど、なぜいきなりさわつてくるのか不思議に思」うと語る。無視することのできない微かな違和感が、明確には言語化できていない形で語り出されている。

あみ子はこれまで母からスキンシップを受けてこなかったと語る文脈の中で、されなかったという否定形ではあるが、「ぶたれたり」「引きずり回されたり」という暴力的な身体接触をイメージしてしまふ。このことから、あみ子が〈触れる〉ということに負のイメージ（破壊や暴力）を抱いていることが推測できるのである。頬ずりすることと引きずり回すことは、正負逆の方向にあるはずだ。しかし、あみ子が母に触れられながら、両者を並置して語っているということは、母の愛撫がどこかで暴力性のようなものと連続しているという、微かな直観が働いているからに他ならない。その後、母と親しく接する場面を経た後でも、母のほくろの接近を受けて、あみ子は〈侵入性〉への動揺をみせ続ける。

あみ子にとって、母のほくろというものは非常に特別な部位であり、以下に挙げるように、それに注目している場面は数多い。

・母が少し小さくなつてに気がついた。別物のようにぺちゃんこになつた腹はもちろんだけれど、あごの下のほくろまでもが。(p.39)

・あんなに小さく見えたほくろが元の大豆粒の大きさに戻つていて、母が声をたてて笑う度にあごの下で一緒に揺れた。

(p.43)

・そのとき初めて母の横顔を知った。母のあごの左下にある、くろぐろと実ったほくろの存在を知った。あみ子はもうそこから目が離せなくなった。(p.78)

・「ほくろおぼけじゃ」そういうと、兄が恐ろしい顔を向けてきた。／「それ絶対にあのひとの前で言うなよ。(中略)あの一ひとのほくろをじろじろ見るのもいけん」(中略)「だってぼろって落ちるよ」(中略)「落ちん。ほくろは落ちん」(p.79)

・そのうち娘のほうでは母がどんな顔をしていたか思い浮かべることさえできなくなった。浮かんでくるのはほくろだけだ。笑っているときも怒っているときも泣いているときも書いているときも食べているときも、いつでも落ちそうだったあの黒大豆のような母のほくろ。(中略)生活してゆく中でほくろは落ちるものではないと知った。それなのになぜか母のにだけはこだわり続けた。(p.100)

あみ子は、母のほくろに「だけ」は「なぜか」「こだわり続け」という、合理的には説明しにくい特別な注目を向け続けている。大豆粒ほどというのは確かに大きくはあるが、異常というほどのものではない。だがそれは、何年も一緒に暮らしていても目をそむけることができないものなのだ。兄は、母の身体的特徴を不躰

に眺めたり馬鹿にしたりしないように注意を与えているが、そのような分かりやすいレベルを超えた関心が、あみ子にはある。

あみ子は母の心身の消耗がほくろに反映されていることに気づく。あるいは、母の顔を忘れてもほくろの姿だけはありありと覚えている。それほどの注目ぶりなのである。あみ子にとっての母は、ほくろという一点に集中しているのだ。

ではあみ子は、なぜここまで母のほくろにこだわるのだろうか。また、それはあみ子に何を語りかけているのであるろうか。

厳格で几帳面、逸脱することを嫌う母の顔に一点ぼつんと載っている黒いもの。あみ子の目には、例えば白い清潔なハンカチについてしまった染みのような、完璧なものを損なう小さな汚点や欠点のようなものに見えていたのではないだろうか。

あみ子は、ほくろほどではないが母の髪にも注目している。「髪を固く一本に縛りあげた」後頭部。この箇所も、例えば〈書道の邪魔にならないように髪をすつきりまとめている〉などと言えれば合理的な説明となる。しかし、あみ子の視線はそれを「固く」「縛りあげた」と捉えているのだ。この表現には、人にも物事にも、そして何よりも自分自身に対して、厳しく律しているようなストイックすぎる母の印象が反映されている。

その、いましめられ厳しく統御された（完壁さ）を損なう一点の（黒い染み）。これについて、前掲した河合隼雄の『影の現象学』^註における「影」の概念を援用しながら考察を深めたい。

人はそれぞれの人なりの生き方や、人生観をもっている。各人の自我はまとまりをもった統一体として自分を把握している。しかし、ひとつのまとまりをもつということは、それと相容れない傾向は抑圧されたか、取りあげられなかったか、ともかく、その人によって生きられることなく無意識界に存在しているはずである。その人によって生きられなかった半面、それがその人の影であるとユングは考える。

（河合隼雄『影の現象学』p.21）

ある人の「生きられなかった半面」は「影」として無意識内に存在し、夢やイメージを通じて意識化されるといふ。その一方、「人間は誰しも影を持っているが、それを認めることをできるだけ避けようとしている」。それゆえ「影の肩代わり」という現象が生じる。

集団の影の肩代わり現象として、いわゆる、いけにえの羊

(scapegoat) ^{註16}の問題が生じてくる。ナチスドイツのユダヤ人に対する仕打ちはあまりにも有名である。すべてはユダヤ人の悪のせいであるとすることによって、自分達の集団の凝集性を高め、集団内の攻撃を少なくしてしまう。つまり、集団の影をすべていけにえの羊に押しつけてしまい、自分達はあくまでも正しい人間として行動するのである。家族のなかで、学級のなかで、会社のなかで、いけにえの羊はよく発生する。それは多数のものが、誰かの犠牲のうえにたつて安易に幸福を手に入れる方法であるからである。無意識な程度のひどい人は、そのうえ、このいけにえの羊の存在によって集団の幸福が乱されると、本気^{（トイ）}に感じている。（p.45）

これに照らし合わせるなら、あみ子は母の影を肩代わりしているという見方も成立するのではないか。また、学校で嘲笑され、いじめの標的とされてしまう傾向について、あみ子が集団の影を肩代わりさせられていると考えることも可能だ。自身の属する共同体の価値観にそぐわない（規格外）な部分を誰しも持っているはずなのに、特定の誰かだけが（異常）であるかのように見なされ裁かれるという集団の影の肩代わり現象。共同体の凝集性とは、まさに（水平方向の価値）の強化に他ならず、あみ子はそのため

の「いけにえの羊」に限りなく近づいているように見える。

ここで、本論「二」の冒頭に引用した部分に戻りたい。

細くとがった二つの目がこちらを見て、とまった。／ゆつくりと近づいてくる母のあごのほくろを見上げながら、あみ子は堂々と訴えた。「入っとらんもんね。見とっただけじゃもん」

(p.16)

あみ子は母の目ではなく、ほくろに向かって訴えかける。母の中にある、この世の秩序に収まりきらない何か、そういうものがわずかに露出している部分（ほくろ）に向かって。

あみ子の中で、まさにイメージの力が作用し、彼女の言動に強く働きかけているのだ。

母のほくろが接近し、ほとんど触れそうになったその瞬間のことを思いだしながら、あみ子は母を手引きする。「弟の墓」を見せに行くために。

「どこ行くの」

「こっちがわ、こっちがわ」(p.51)

「きぼう」「とつぷやき」「お母さんの好きな言葉なの、と母は言っ

たけれど、それどころではな」く、あみ子は「それ」よりも大事なことを母に伝えようとして「こっちがわ」へと導いていく。あみ子の言う「こっちがわ」とは、今母が立っている場所ではなく、目には見えない境界線を隔てた（あちら側）だ。それは、この世からすでに多くの影を背負わされているあみ子の領域であり、あみ子は影の世界へと母を案内する。

時間もちやうど、昼の領域から夜の領域へと転じる境目に差し掛かっている。

日が暮れかかっていた。隣の家の台所から、フライパンで勢いよく具材を炒めるような音が聞こえてきた。

「これこれ」あみ子は立ちどまって指差した。

「なあに」母が腰を屈めて、娘が指し示す先を見つめた。

外は薄暗いけれど、文字が読み取れないほどではない。白いプランタの中、『金魚のおはか』『トムのおはか』と並んで土に埋めこまれている木の札に、母が顔を近づけた。（中略）
冷凍されて固められたかのように、中腰になったままの母は
ぴくりとも動かない。（p.51）

価値ある美しいプレゼントであるはずの木札。しかし、そこに

はあみ子自身思いもよらなかつたようなメッセージが隠されていた。「弟の墓」と書かれた木札を裏返すと、花泥棒に対して警告する「ハナトルナー」というメッセージが現われる。あみ子は、「花はどこにも咲いていなかった」場所でこの立て札を発見し、「弟の墓」の材料として引き抜いてきたのだ。「トルナー」という発信者からの禁忌を破っているのはもちろんあみ子である。しかしそのオリジナルのメッセージは、あみ子の手へと渡ったことで、はからずも彼女の抵抗を代弁するような意味へと変換されていく。〈あみ子から異才の芽を摘み取らないでほしい〉という、母ひとりではとても受け止め切ることのできない、むしろあみ子の属する共同体全体に対して突き付けられた裏のメッセージとして。

おわりに

本論では、先行研究において〈世界の酷薄さを見ずに、気づかずにいられる人物〉と捉えられてきたあみ子像への反証を試みた。あみ子の視線をなぞる三人称の語りの中に、イメージの働きを媒介とした、あみ子の鋭敏な世界把握のありようが反映されている。紙幅の都合上、あみ子と「のり君」をめぐる考察の大半を収めることが叶わなかったが、それについては機会を改めて論じたい。最後に次の点について述べておきたい。

共同体の常識に馴染めず孤立していたあみ子であったが、語りの現在において、小さな関係の兆しが表示されている。

中学卒業後、祖母の家に引き取られたあみ子には、そこで一人の友人ができる。先行研究において、全くと言っていいほど言及されてこなかった「さきちゃん」という年下の女の子だ。彼女は、あみ子の家までの「子供の足であるけば十五分以上もかかる」道のりを、なぜか「いつも」竹馬に乗って遊びに訪れる。

あみ子に関心を向け、あみ子を慕うさきちゃんが竹馬に乗って現われるという点は、本テクストにおいて極めて象徴的である。地上をぎこちなく進んでいく、「まるでその場で足踏みをしているかのようにのろい」竹馬の歩行は、遅いばかりではなく、足が地面から常に高く浮き上がった歩行でもある。それは、その位置にいるがゆえの遅さ・ぎこちなさである。だが、この〈垂直方向〉への身構えを持ったさきちゃんの歩行は、まさにあみ子自身が体現する〈垂直方向性〉と響き合っている。

さきちゃんのそうした〈垂直方向性〉は、彼女のあみ子に対する関心の寄せ方にも及んでいる。「あみ子の暗い穴がさきちゃんのお気に入り」、つまり、あみ子が自分自身でも「気に入った」ので治療せずに残している、「歯茎と穴のでこぼこ」（のり君にパンチされて前歯が三本抜けた後の「空洞」）に、さきちゃんは強い興味

を示す。そして、そこに秘められた謎を知りたがる。また、あみ子に「畦道に咲く毒花」をねだって「黄色くてかわいいあの花がどうしても欲しいです」と「珍しく駄々をこね」る。

さきちゃんが接近してきているという状況への、あみ子の微かな違和感や恐れは、「だいじょうぶ。あの子は当分ここへは辿り着きそうもない」と、むしろ遠さとして語ろうとする箇所に現われている。

しかし、それでもあみ子は「さきちゃんのことを好き」と思い、「友達を大切にしないで」という思いから「『イーしてください』と言われればイーしてあげる」。あみ子も彼女に思いを寄せ、友人として受容するかなのような行動を取っているのだ。

また、毒花を持ち帰ったさきちゃんが叱られたと聞くと、「今度はこの子のお母さんにも喜ばれるような花を持って帰らせてあげなくては」と考えて、すみれの花を採るという配慮をみせる。周囲と平穏な人間関係を築くための〈水平方向〉への身ぶりを、あみ子は模索し始めていると言つてよいだろう。これを象徴するかなのように、庭のすみれは「土から吸収される養分がよほどいいものなのか、日当たりが悪いにもかかわらず」、「大ぶりで、濃くてきつい紫の花を咲かせ」ていると語られ、根ざすものを育む大地の豊穣さという〈水平方向の価値〉の大らかな側面に焦点が当て

られている。あみ子自身も、植物の豊かな広い敷地に馴染み、のびのびと振舞う。しかし、危険な花の根は切り落とされる。あみ子は、すみれを「根」のついたまま土ごと「スコップ」ですく取るが、対比的に、黄色い毒花は「花鋏で」切断している。

一方、さきちゃんがあみ子の中に見いだし、あるいはねだっているものは、秘密や危うさの匂いをほらんだ、いわば〈垂直性〉の魅力である。ここに両者の補完的關係を見ることができよう。

あみ子は微かな恐れとともにさきちゃんを待つ。これから先、あみ子が繋がっていく人々や物事は、あらゆる意味で〈決して普通ではない〉のかもしれない。だが、あみ子の持つ、世間一般的な物事からの逸脱性、すなわち〈垂直方向性〉が、新しい場所に向かつて開花していく様を予感、あるいは期待させる結末である。

〈風変わりな人物〉が〈風変わりな人物〉と友達になりたがつて接近するというモチーフは、その後の今村テキスト『むらさきのスカート註の女』において変奏されていくことになる。さきちゃんがあみ子にねだる毒花の「黄色」と、あみ子がさきちゃんに贈ろうとするすみれの「紫」という補色の関係にある二つの色も、こちらのテキストでは「むらさきのスカートの女」と「黄色いカイデイガンの女」という形で、再び対をなしつつ現われる。

これらについても、いずれ機を得て論じてみたいと考えている。

注

- 注1 佐々木敦「あたらしい小説」のために——今村夏子論（小説トリック）二〇一九年秋季号）
- 注2 江南亜美子「星の子」今村夏子 世界を認識する力の弱さ」（『文學界』二〇一七年八月号）
- 注3 「人」今村夏子さん「まだまだ修練」（『読売新聞』東京 二〇一一年六月二十八日朝刊）
- 注4 「文庫・新書」（『朝日新聞』二〇一四年八月三日朝刊）
- 注5 待田晋哉「『文芸月評』 何げない風景の細部 温かみもすれ違いも写し取り」（『読売新聞』東京 二〇一六年二月二十九日朝刊）
- 注6 野波健祐「2度目の芥川賞候補作『星の子』が好評 今村夏子さん「天然小説家」の輝き」（『週刊朝日』二〇一七年八月一日）
- 注7 「（天声人語）今村夏子さんに芥川賞」（『朝日新聞』二〇一九年七月二〇日朝刊）
- 注8 「確かに、この作品の主人公は愛おしい。が、現実には彼女を救いた人間は、まず医療や社会福祉を通じての救済を考えるだろう」（平野啓一郎「徹底性に拘って」『新潮』三島由紀夫賞選評 二〇一一年七月号）、「主人公のあみ子は明示されていないもの、おそらく何らかの知的障害をもっている。秩序を守れず授業にいけない、風呂に入ろうとしない、靴をはかない、といった行動は発達障害を思わせるもので、さらに相手の意図や感情が読み取れず、うまくコミュニケーションがとれないといった症状も描かれる」（阿部公彦「主観共有の誘惑——フォークナーから谷崎潤一郎、今村夏子まで」『フォー
- クナー第20号』二〇一八年五月）、「何らかの障害を持つていると思われるあみ子は、家族やまわりの人たちの感情を読み取れず、うまく付き合うことができない。でも、そう思っているのはまわりの人と、私たち読者だけ。本人は（中略）ごくふつうのつもりなのだ」（阿部公彦「今村夏子『むらさきのスカートの女』裏今村夏子」は足が速いらしい「すばる」二〇一九年九月号）と指摘されている。
- 注9 「あみ子のように奇矯な行動を取る子供に、何らかの症候群などのレッテルを貼るのは簡単だ。しかし本作品ではそんなことは一切語られない。ただ、あみ子の視点がとらえた世界がそのままに描出されていくだけだ（瀧井朝世「サイン、コサイン、偏愛レビュー第13回 ただ一人で築く」『波』二〇一二年四月号）と指摘されている。本文中で引用した江南氏の指摘のほか、「子供を流産した母親を励まそうとした行動は、無邪気さゆえとはいえず、あまりにむごい」（瀧井朝世 書誌情報は注9に同じ）、「主人公のあみ子は純粹ゆえに社会と相いれず、級友からも家族からも疎外される」（『沈黙 2年後の手応え 短編「あひる」第15回芥川賞候補 今村夏子さん』『読売新聞』大阪 二〇一六年八月四日夕刊）、「『こちらあみ子』や『星の子』では、純粹すぎて周囲との認識にズレがあったり」（小谷裕香「本の学校から」一方面的で不穏な愛」『朝日新聞』鳥取全県版 二〇一九年八月一八日朝刊）と指摘されている。
- 注11 橋富政彦「注目の新進作家」（『ダ・ヴィンチ』二〇一二年三月号）
- 注12 瀧井朝世（書誌情報は注9に同じ）
- 注13 河合隼雄『影の現象学』（思索社 一九七六年六月）

注14 高橋有紀『星の子』で話題の作家・今村夏子さん 書店員に愛される作家」(「アエラ」二〇一七年七月三一日)

注15 注13に同じ

注16 旧約聖書では羊は特別な存在であり、神が定めた生贄の動物のうちの一種である(「レビ記」と同時に、ユダヤ人の象徴である(「主は羊飼いのようにその群れを飼い/その腕に小羊を集めて、懐に抱き/乳を飲ませる羊を導く」イザヤ書40:11)。該当部分はユダヤ人が犠牲にされる文脈なので、あえて「scapegoat」(原文「scape goat」、講談社学術文庫版『影の現象学』(講談社 一九八七年十二月)にて訂正されている)を「いけにえの山羊」ではなく「いけにえの羊」と訳しているのであろう。(聖書の引用は『聖書 聖書協会共同訳』日本聖書協会 二〇一八年による)

注17 今村夏子『むらさきさのスカート』(朝日新聞出版 二〇一九年六月)

*本稿は、第63回群像新人評論賞(二〇一九年)最終選考通過作「赤い部屋の秘密——今村夏子「こちらあみ子」論」の一部を元に、大幅に書き改めたものである。掲載にあたっては「群像」編集部の手許を得た。

*テキストの引用は『こちらあみ子』(筑摩書房 二〇一一年一月)を底本とした。なお、引用文中の改行は適宜「」に置き換え、引用者による中略は「中略」で示した。

(おの みつえ 総合研究大学院大学博士後期課程在学)